

\* 下図「フローベール」は、自己のロマネスク(理想人間像C)を語らない。彼の方法は、實證精神即ち「現實(リアリズム=ボヴァリー: A)の醜惡を素材として美( B: ロマネスク・夢想家⇒C理想人間像)を志向する創作方法」とならざるを得ない。右下枠参照。「ボヴァリーの失敗によつて、(リアリズム)小説批評が完成される」のである。「マダム・ボヴァリーはわたしだ」と言つたのは、「自分の夢をそんな形でしか提出しえなかつたからだ」(『小説の運命 II』P617)。

\* 『チエーホフ』(下図)…《トルストイの「精神B主義」の影響から脱皮》

\* 「トルストイがチエーホフを『空家』(擴大B空白)にして去つた」、その空家(擴大B領域)に、クリスト教の代はりに「教養ある自由人の觀念」「無執着」が引越してきたと恒存は言ふ。つまり、医者としての實證精神(A'⇒A)が持つ「監視の眼」で『空家』(B空白)を狹小化(精神の政治學ラインの最下降化)。そして結果としての個人主義否定(全二P179『チエーホフ』参照)。

